

(論文)

## マタイによる福音書 21 章 33-43 節における『ぶどう園と農夫』の 譬え——神の国は誰から取り上げられ誰に与えられるのか

本 多 峰 子

### 序 問題の所在

マタイによる福音書 21 章 33-43 節の『ぶどう園と農夫』の譬えは、著者マタイ<sup>1</sup>が、資料とするマルコによる福音書にある『ぶどう園と農夫』の譬えを用い、加筆編集を加えたものである。マルコによる福音書では、この譬えは以下のようになっている<sup>2</sup>。

12:1「ある人がぶどう園を植え、垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。<sup>2</sup> 収穫の時期になったので、ぶどう園の収穫から受け取るために、一人の僕を農夫たちのところへ送った。<sup>3</sup> だが、農夫たちは、この僕を捕まえて袋だたきにし、何もたずに帰した。<sup>4</sup> そこでもう一度、別の僕を送ったが、彼らはその頭を殴り、侮辱した。<sup>5</sup> 更に、もう一人を送ったが、これを殺した。そのほかに多くの僕を送ったが、殴ったり、殺したりした。<sup>6</sup> まだ一人、彼には愛する息子がいた。『私の息子は敬ってくれるだろう』と言って、最後に息子を送った。<sup>7</sup> その農夫たちは話し合った。『あれは跡取りだ。さあ、彼を殺してしまおう。そうすれば、相続財産はわれわれのものになる。』<sup>8</sup> そして、彼を捕まえて殺し、ぶどう園の外にほうり出した。<sup>9</sup> さて、このぶどう園の主人は、どうするだろうか。戻って来て農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるだろう。<sup>10</sup> 聖書にこう書いてあるのを読んだことがないのか。『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石にされた。<sup>11</sup> これは、主によってなされたことで、私たちの目には不思議に見える。』」(マルコ 12:1-11)

マタイは、この譬えをほぼ同じあらすじを保持しながら、細部にかなりの変更を加え、以下のように収録している。

21:33「もう一つの譬えを聞きなさい。ある地主の人がぶどう園を植え、垣を巡らし、その中に搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。<sup>34</sup> さて、収穫の 때가近づいたので、自分の収穫を受け取るために、自分の僕たちを農夫たちのところへ送った。<sup>35</sup> だが、農夫たちは彼の僕たちを捕まえて一人を袋だたきにし、

一人を殺し、一人を石で打ち殺した。<sup>36</sup> また、他の僕たちを前よりも多く送ったが、彼らのことも同じ目に遭わせた。<sup>37</sup> そこで最後に、『私の息子なら敬ってくれるだろう』と言って、主人は自分の息子を彼らに送った。<sup>38</sup> 農夫たちは、その息子を見て話し合った。『これは跡取りだ。さあ、彼を殺して、彼が相続する財産を手に入れよう。』<sup>39</sup> そして、息子をつままえ、ぶどう園の外にほうり出して殺した。<sup>40</sup> さて、ぶどう園の主人が帰って来たら、この農夫たちをどうするだろうか。」<sup>41</sup> 彼らは彼に言った。「その悪人どもをひどい目に遭わせて殺し、ぶどう園は、実りの季節には彼に収穫を納めるほかの農夫たちに貸すだろう。」<sup>42</sup> イエスは言われた。「聖書にこう書いてあるのを、まだ読んだことがないのか。『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石にされた。これは、主によってなされたことで、私たちの目には不思議に見える。』<sup>43</sup> だから、言うておくが、神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民に与えられる。<sup>44</sup> この石の上に落ちる者は打ち砕かれ、この石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう。」(21:33-43)

本論の目的は、マタイがマルコからこの譬えを収録するにあたって加えた変更、編集の意図を解釈し、特に 41 節の「ほかの農夫」と 43 節「それにふさわしい実を結ぶ<民>」の「民」(ἐθνος)とは誰なのか、あるいはどのような人々のことを言っているのかをマタイ福音書の文脈の中で明らかにすることである。マタイが彼の福音書で、神の国が与えられるであろうとする「ほかの農夫」、そして、それを言い換えた「民」は、マルコで、ぶどう園が与えられるであろう「ほかの人たち」(12:9)と同じに解釈してよいのか—結論を先取りすれば、同じではない—を論じ、マルコとマタイの相違も明確にすることでマタイ福音書でのこの譬えの意味と位置づけも明らかにする。そのために、本論ではまず、マルコ福音書でのこの譬えの意味を、序論にふさわしい程度の詳細さで論じ、次に、マタイがマルコ福音書に加えた変更を検討し、その後、マタイ福音書で最終的にぶどう園を与えられる「ほかの農夫」、神の国が与えられる「民」とはどのような人々のことを指しているのかを結論づける。

## I マルコによる福音書 12:1-12 の「ぶどう園と農夫」の譬え

この譬えは、イザヤ書 5 章 1-7 節の以下の譬えを踏まえていると考えられる。

5:1 私は歌おう、私の愛する者のために  
そのぶどう畑の愛の歌を。私の愛する者は、肥沃な丘に  
ぶどう畑を持っていた。  
2 よく耕して石を除き、良いぶどうを植えた。その真ん中に見張りの塔を立て、  
酒ぶねを掘り  
良いぶどうが実るのを待った。しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。  
3 さあ、エルサレムに住む人、ユダの人よ  
私と私のぶどう畑の間を裁いてみよ。  
4 私がぶどう畑のためになすべきことで  
何か、しなかったことがまだあるというのか。私は良いぶどうが実るのを待ったのに  
なぜ、酸っぱいぶどうが実ったのか。

<sup>5</sup> さあ、お前たちに告げよう

私がこのぶどう畑をどうするか。囲いを取り払い、焼かれるにまかせ

石垣を崩し、踏み荒らされるにまかせ

<sup>6</sup> 私はこれを見捨てる。[…]

<sup>7</sup> イスラエルの家は万軍の主のぶどう畑

主が楽しんで植えられたのはユダの人々。

主は裁き（ミシュパト）を待っておられたのに

見よ、流血（ミスパハ）。正義（ツェダカ）を待っておられたのに

見よ、叫喚（ツェアカ）。（イザヤ 5:1-7）

イスラエルは旧約ではしばしば、神のぶどう園にたとえられる（イザ 5:1-2 の他には、創世 49:22、詩 80:9-10、エレ 2:22 など）。イザヤ書のこの個所で、神はぶどう畑（イスラエル）を手塩にかけて育てるが、イスラエルは神に背き、神の期待に反する<sup>3</sup>。そして、主が裁きと正義を待っていたのに反して、流血や叫喚で応える（特に 5:7）。イエスの譬えに描かれた、使者に対してついには殺人にまでエスカレートする敵対行為は、イザヤ書の譬えのこの流血や叫喚に対応する。エレミアスが解釈したように、この譬えのぶどう園はイスラエル、ぶどう園を借りている農夫たちはイスラエルの指導者たち、ぶどう園の持ち主は神、使者たちは預言者たち、息子はキリストを表していると読むことができる<sup>4</sup>。ただし、エレミアスはさらに、農夫たちに下される罰をイスラエルの滅亡、ぶどう園を与えられる「『ほかの民』（マタイ 21:43）とは異邦人教会のことである」<sup>5</sup>と解釈しているが、これが正しいかは疑問である。スノドグラスは、ぶどう園がイスラエルを表すと見る解釈に反対して、ぶどう園がイスラエルならば、神がイスラエルを取り上げて他の人々の手に渡すということになってしまうが、それでは意味が通じないので、ぶどう園は神の関心事と考えるほうが良いと考えている<sup>6</sup>。しかし、スノドグラスの反論は、ぶどう園とぶどう園の農夫を同一視しないかぎり不要であり、ぶどう園をイスラエルの民、その世話をするべき労働者をイスラエルの指導者たちと考えれば、神が当時の神殿支配者たちからイスラエルの民を教会（あるいは、イエスの神の国運動のグループ）に引き渡すであろうとの預言と理解でき、筋が通る。しかも、エレミアスの解釈は、マルコ、マタイ、ルカ、トマスの並行記事を区別せずに、イエスの譬えとしてなされており、上記のように「ほかの民」についてはマタイを参照しているので（以下で見るように、マタイ福音書においても、「ほかの民」は異邦人教会ではないと考えられるが）、とくにマルコ福音書の理解を考えるときには必ずしも当たらないと見るべきである。

マルコ福音書の「ぶどう園と農夫」の譬えが、ヘブライ聖書そのものよりもむしろイザヤ書のアラム語訳であるタルグムを下敷きにしているであろうことは指摘される。タルグムはもとのヘブライ語聖書のぶどう園の歌に変更を加え<sup>7</sup>、ぶどう園がイスラエルの譬えであることを「ぶどう園に譬えられるイスラエルに」（5:1）と明示し、建物や堀の代わりに、「＜高い＞丘」（神殿の山を示す）や「聖所」や「聖壇」への言及を入れて、農夫たちがイスラエルの民の世話を任せられ、収穫を主に渡すべき祭司たちであることを明らかに示している。この訳では、神の罰は、神のシェキーナ（臨在）が農夫たちから取り上げられ、聖所が破壊され、預言が止むということによって表され、神が神殿の守り手である祭司たちに下したものと理解されている。マルコの「ぶどう園の農夫」の譬えは、このタルグムの形に沿って、神

殿の権威筋に対する批判と理解できる。マルコ福音書では、この譬えは祭司長、律法学者、長老たちを聞き手として語られており、彼らは、この譬えが自分たちへのイエスの当てつけだと気づいたとある（12:12）からである。マルコの読者は、この「農夫」たちが12章12節で言及された祭司、律法学者、長老たちであること、中でも特に、タルグムとの連想から、イザヤ書で批判されているのと同様、祭司たちと理解したのであろう<sup>8</sup>。タルグムが文書化されたのは新約文書が書かれた時代よりも後になるが、口承では、すでにアラム語に翻訳されたものが流通していたと見られる<sup>9</sup>ので、「ぶどう園と農夫」の譬えは、アラム語でイザヤ書を用いていた1世紀の人々がここに読み込んだ神殿批判を共有していると考えられるのである。

また、マルコ12章6節の「愛する一人息子」は、1章11節や9章7節で、イエスが神に「私の愛する息子」と呼ばれる言葉を連想させ、この譬えの中で殺される息子とイエスを同定させる<sup>10</sup>。さらに、12章10-11節の「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石にされた。これは、主によってなされたことで、私たちの目には不思議に見える」は詩編118編22節（117:22LXX）からの引用であるが、この詩編のタルグムでは、家づくりの捨てた少年がエッサイの息子の一人であり王に任ぜられ支配者になるに値したとなっている。つまり、ダビデ王への言及として書かれている。これは、ヘブライ語のאֶבֶן (ʾēben 石) と בֶּן (bēn 息子／少年) の言葉遊びからきたもので、LXXにはない。マルコの文脈では「捨てられた石」は、おそらく読者にはイエスとダビデの連想も働き、明らかにイエス自身を表している。ここでマルコは、ユダヤの権力者たちとイエスの対立を明らかに示し、イエスが自分の死を覚悟して最後にエルサレムに入場したこと、そして彼が、自分が殺された時には、神が人知を超えた方法で自分の宣教運動の実りをもたらしてくれるであろうと確信していたのだと、読者に納得させようとしているのである。

このように、マルコ12:1-11でのこの譬えは、神がイスラエルの民に繰り返し預言者を送って来たのに民がそれら預言者を受け入れずに背いてきた歴史の中にイエスを位置づけ、イエスが最終的に神に遣わされた権威ある者（独り子）であることを示し、彼を退ける指導者たちが受ける罰と、ついには成就されるであろう救いの約束を表す。そのように理解される時、この譬えは、マルコ福音書の縮約、あるいは聖書すべての縮約とさえ言われ得る<sup>11</sup>。

イザヤ書では、神の裁きとして、ぶどう園が神に見棄てられる。そして読者には、イスラエルの民が紀元前6世紀に亡国と捕囚を被ったことが、史実上のその表れと考えられたであろう。しかし、マルコは、ぶどう園であるイスラエルの民衆が、その指導者たちから取り上げられ渡される先を、救いに変えている。指導者にとっては容赦ない裁きがあるが、ぶどう園そのもの（＝民）には救いを確約するのである。

## Ⅱ マタイがマルコに加えた変更

マタイは、この譬えを、マルコよりも一層はつきりと、神の救済史を表す譬えにしている。まず、第一に、マルコで「ある人が」（ἄνθρωπος, 12:1）となっているところを、「ある地主の人が」（ἄνθρωπος ἦν οἰκοδεσπότης ὅστις, 21:33）として、この人がぶどう園の所有者（主人）であることを明示している。34節では、マルコで「収穫の時期になったので」（12:1）とあるのを「収穫の時が近づいたので」として、3章2節での「天の国は近づいた」（並行マルコ1:15「神の国は近づいた」）での、洗礼者ヨハネの宣教使信と合わせ、マタイ福音書の救済史全体の枠組みに適合させている。さらに、マルコでは、農園主は4回僕を遣わしており、

それは「一人の僕を農夫たちのところへ送った […] もう一度、別の僕を送った […]」更に、もう一人を送った […] そのほかに多くの僕を送ったが」(マルコ 2:5) というように書かれているが、それを「自分の僕たちを農夫たちのところへ送った […]」また、他の僕たちを前よりも多く送ったが」として、僕の派遣を二組にしてある。エレミアス<sup>12</sup>、ドナヒュー<sup>13</sup>、マイアー<sup>14</sup>などが解釈するように、これは、前期預言者と後期預言者に対応させていると読むことができる。これも、マタイがこの譬えを神の救済史のシナリオに明確に合わせるために加えた変更点である。次の変更点として、マタイは、マルコ 12:6 にある「<sup>6</sup>まだ一人、彼には愛する息子がいた」を無くして、「そこで最後に、『私の息子なら敬ってくれるだろう』と言って、主人は自分の息子を彼らに送った」(21:37) としているが、これはおそらく、物語の流れを良くするために、ハグナーが指摘するように、「愛する息子」という表現にはなくても、ここで父なる神がついに、わが子とするイエスを送ったことを暗示していることは明白である<sup>15</sup>。それに対する民の応答の悪辣さを強調するために、マタイは、マルコでの「さあ、彼を殺してしまおう。そうすれば、相続財産はわれわれのものになる」(12:7) を「さあ、彼を殺して、彼が相続する財産を手に入れよう」(21:38) というように、相続財産を奪うことが、息子殺しの結果ではなく、積極的な目的であることを明白に表す書き方にしている。39 節で、農夫たちが息子を殺すくんだり、マルコで「そして、彼を捕まえて殺し、ぶどう園の外にほうり出した」(12:8) となっている個所を、「そして、息子を捕まえ、ぶどう園の外にほうり出して殺した」(21:39) としている。その結果、これは、イエスがまずエルサレムの町の城壁の外に引き出されてゴルゴタの丘で殺された状況と合致したものとなっている<sup>16</sup>。さらに、マタイが加えた大きな変更点として、マルコではイエスが譬えを話し終わった後で、「主人は、どうするだろうか。戻って来て農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるだろう」(12:9) と、彼自身が答えを述べているのに対し、マタイは、『『ぶどう園の主人が帰って来たら、この農夫たちをどうするだろうか。』<sup>41</sup> 彼ら [21:23 で出てきている祭司長や民の長老たち] は言った。『その悪人どもをひどい目に遭わせて殺し、ぶどう園は、実りの季節には彼に収穫を納めるほかの農夫たちに貸すだろう』」(21:40-41) として、祭司や長老が自分たちへの裁きを自分たちで述べるような形にしてある。この形は、サムエル記下 12:1-7 などに見られるユダヤの論法の伝統を踏襲しており、譬えを語ってその中の登場人物に対する有罪宣告をテキスト内の聞き手にさせ、聞き手自身に自分たちへの有罪宣告をさせるような状況にもっていくことで、その有罪性をその聞き手に認識させる働きをする<sup>17</sup>。さらに、マタイでは、まず、テキスト内の聞き手である祭司長や民の長老たち (21:23) が「その悪人どもをひどい目に遭わせて殺し、ぶどう園は、実りの季節には彼に収穫を納めるほかの農夫たちに貸すだろう」(21:41) と答えるだけではなく、それを受けてイエスが、「神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民に与えられる」(21:43) と再度繰り返すことによって、譬えの中の「ほかの農夫」が神の国にふさわしい実を結ぶ民であることが明示されると同時に、繰り返して言われることによって強調されている。しかも、「ぶどう園」を「神の国」と言い換えることで、マルコではイザヤと同様イスラエルの民を表していた「ぶどう園」が、神の国に置換されている。「ぶどう園」の意味がここで微妙に変えられているのである<sup>18</sup>。このことは、本論Ⅵで考察する 43 節の「良い実」や、本論の主題の「民」の意味に関わる。

この個所でのもう一つの顕著な変更点は、マルコでは主人が農夫たちを殺すために戻って



くると言われているのに対し、マタイでは、イエスの質問で、「主人が戻ってきたら」どうするか、となっていることである。ぶどう園の主人は息子を殺されたのだからマルコのように、「戻ってきて農夫を殺す」ほうが、「戻ってきたら」「殺す」よりも筋書きとしては自然なのだが、マタイは、「戻ってきたら」とすることで、この主人（ὁ κύριος）が帰還すれば、という意味を出し、マタイ共同体が未来に待望する「主」ὁ κύριος イエスの再臨と、その時に行われるであろう裁きのモチーフを導入している。さらに、裁きとして、主が、ぶどう園をこの農夫たちから取り上げ、与える先がマルコでは「ほかの人たち」（ἄλλοις 12:9）とあるだけなのを、マタイでは、「ほかの農夫たち」（ἄλλοις γεωργοῖς 21:41）に与えるであろうと言われている。そして、それが「神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民に与えられる」（21:43）と言い直されている。神の国を与えられるのは、ふさわしい実を結ぶ「農夫」たちなのである。さらに、44 節では、「この石の上に落ちる者は打ち砕かれ、この石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう」との、マルコにはない一節が入れられ、隅の頭石となる石（＝イエス）に危害を与えようとする者たち、彼と衝突する者たち（ユダヤの指導者たちと、その指導者と結びついた人々）には破滅が待っている<sup>19</sup>との予言も加えられている。

### Ⅲ この個所についての他の研究者の解釈

神の国は、誰から取り上げられ誰に与えられると言われているのか。この、「誰から」の部分は、文脈からすれば、テキスト内でのこの譬えの聞き手である祭司や長老、つまり、イスラエルの指導者たちである。この点については研究者の意見は一致している。また、マタイによる福音書でイエスの十字架刑を求める群衆が、「その血の責任は、われわれとわれらの子にある」（マタイ 27:25）と叫ぶ言葉が、70 年にローマによってエルサレムが陥落した惨劇をイエスを殺したことへの罰と見るマタイの見方を表していると解釈できる<sup>20</sup>ことを考えると、神の国（エルサレムに象徴される）が取り上げられるのは、イエスを受け入れず殺した世代のユダヤ人たち全体までを含むと読むこともできる。しかし、それが与えられる「民」が誰かについては、異邦人<sup>21</sup>、教会<sup>22</sup>、とくに異邦人教会<sup>23</sup>、ユダヤ人と異邦人の混合であるキリスト教の教会<sup>24</sup>、ユダヤ人キリスト教会の指導者たちなど、さまざまである<sup>25</sup>。はっきりとは特定されていないという見方もある<sup>26</sup>。特に本論で賛同したいのは、指導者らと異なり神の意志を実行する者たちである、との見方であり、それが正しいことを本論では以下で検証したい。

### Ⅳ マタイ福音書の中でのこの譬えの位置

マタイ福音書の中でこの譬えと、特に、神の国が誰から取り上げられ誰に与えられると言われているのかを考えるとときには、この譬えが置かれている位置を見ておく必要がある。すなわち、マタイが、この譬えを、祭司長や民の長老たちとの論争の、三つの譬えの二番目、つまり真ん中に置いていることである。

「二人の息子」の譬え（21:28-30）、「ぶどう園と農夫」の譬え（21:33-39）、「婚宴」の譬え（22:1-13）とそれに伴う問答（21:31-32, 40-45）でのイエスの言葉は、一貫してユダヤの宗教的指導者たちを辛辣に批判し<sup>27</sup>、彼らが最初に神の招きを受け、神の意志を示されたのにそれに従わず（21:32, 34-39; 22:2-6）、かえって神の使者である預言者を迫害するような暴挙に

出たことを譬えで語り、神の国は彼らではなく、神の招きを受け入れ神の望み通りにした者たち (21:31-32)、神の国にふさわしい実を結ぶ者たち (21:43)、神の招きを受け入れる者たち (22:9-10) に与えられると言われている。この文脈から考えられる一番自然な解釈は、それゆえ、この「ぶどう園と農夫」の譬えでの「実りの季節には主人 (= 神) に収穫を納めるほかの農夫たち」、「神の国 [...] にふさわしい実を結ぶ民」とは、神の意志に従いその意思を行なう者であるという解釈であろう。

これは、マタイのイエスが他の個所で言う、「私に向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。私の天の父の御心を行う者だけが入るのである」(7:21) と一貫する (12:50 のイエスの言葉、「だれでも、私の天の父の御心を行う人が、私の兄弟、姉妹、また母である」も参照)。

ただし、これだけでは実際のところ、われわれの問いは解決していない。マタイにおいて問題になるのは、どのような者が「神の御心を行なう者」と言われているのか、である。

## V 神の意志を行なう者とは

神の国に「ふさわしい実を結ぶ」という表現は、マタイ福音書では 3 章にある洗礼者ヨハネの宣教の言葉、「悔い改めにふさわしい実を結べ」(3:8) を思わせる。ヨハネが要求する悔い改めとは、マラキ書 3:7、ゼカリヤ書 1:3 などで言われているのと同じ、神への立ち帰りであり、その立ち帰りのしるしとして結ぶ実とは、ヨハネに洗礼を受け、モーセ五書に戻ることでありと解釈できる。しかしライザーが指摘するように、イエスが「悔い改めよ。天の国は近づいた」(マタイ 4:17) という悔い改めはこれと異なり、イエスを信じ、イエスの言葉を受け入れるようになることと解釈できる<sup>28</sup>。ただし、マタイにおいて、イエスの言葉を守ることは、決して、トーラーを守ることとは異ならない。

マタイ福音書でのイエスの言葉は、ルカ福音書やマルコ福音書と比較して、はるかに強く実際の行為を要求するものであることは、認識されている。マタイのイエスは、5:17 「私が来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。18 はっきり言うておく。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない」と言い (5:18。並行箇所がルカ 16:17 「律法の文字の一画がなくなるよりは、天地の消えうせる方が易しい」にある)、「人にしてもらいたいと思うことはすべて、そのようにあなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である」(7:12) と命じている。これもルカに並行箇所があり、ルカでは、「人にしてもらいたいと思うことを、同じように人にしなさい」(6:31) とあるが、マタイは、「すべて」と強調し、それを律法と預言者の書をひとことで言い表す中核的戒めと位置付けている。

より具体的に、「天の父の御心を行なう」、つまり神の意志を行なうとはどのようなことなのか示されているのは、5 章の 21 節以下である。「言うておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない」(5:20) と言った言葉に続けてイエスが提示する、律法を完成させる義、ファリサイ派の人々の義にまさる義を實踐することがこれである。ここでイエスが示しているのは、「人にしてもらいたいと思うことはすべて、そのようにあなたがたも人にしなさい」ということの内容の代表的な例であり、網羅的ではないと考えるべきであるが、彼はここでまず、モーセ律法の十戒にある「殺すな」、「姦淫するな」を取り上げて、「殺すな」どころか、兄弟に

対して腹を立ててはならない (5:21-22)、兄弟が自分に反感を持っているなら、和解しなければならない (5:23-24) と指示する。また、実際に姦淫の行為はしなくても、みだらな思いで他人の妻を見るだけでも、すでに姦淫を犯したことになる、とモーセ律法の内面、つまり、戒めの基底にある心の問題にまで踏み込んで、表面上だけで律法を守るのではなく、心から守るべきであることを強調する。離縁に関する旧約の規定も、偽りの誓いの禁止も、破棄されるのではなく、さらに厳しくされる。イエスの戒めは、完全に旧約の律法を守り、その上でさらに、内面的に、その律法の心を重視し、それをも守るように指示している。

5章38-48節は徹底的に人を赦すことを命じるものであり、「だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」(5:39)と、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(5:44)は、以下で言われている、「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」(5:48)の大きな内容として語られている。

この、他人を赦しなさいという戒めは、マタイでは、この福音書にしかない「仲間を赦さない家来」(18:23-35)の譬えで強調されている。この譬えは、ペトロの、「主よ、兄弟が私に対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。7回までですか」(18:21)という問いに対するイエスの答え、「あなたに言うておく。7回どころか7の70倍までも赦しなさい」(18:22)と結びついて、「天の国」の譬えとして語られる。そのあらすじは、次のようである。

ある王が、家来たちに貸した金の決済をしようとしたところ、一万タラント借金している家来が返済できず、ひれ伏して、きっと全額返すから、と返済猶予を乞い願った。主君は、自分の僕であるこの家来を「憐れに思って」(18:27)彼を赦し、借金を帳消しにしてやる。しかし、この家来は、外に出て、自分に100デナリオン<sup>29</sup>借りている仲間に出会うと、厳しく返済を要求して、相手が返済猶予を乞い願っても聞き入れず、牢に入れてしまった。それを見た仲間に話を聞いた主君は、怒って僕を呼びつけ、借金の免除を取り消し、彼を牢役人に引き渡した。そして、主君は彼にこう言うのである。「<sup>18:32</sup> お前が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。<sup>33</sup> 私がお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか。」(18:32-33)

この譬えの最初の部分、27節で王が僕を「憐れに思って」σπλαγχνισθεὶς 彼を赦したとあるこのσπλαγχνισθεὶςという語は、はらわたが千切れるほどの同情を感じていることを表す語で、この主君が僕の苦境を自分の身を感じるほど、親身に「同情」したことが示されている<sup>30</sup>。この同情によって、僕は、主君との関係において法的正義の領域から愛と憐れみと赦しの領域に移されたのである。しかし同僚を赦さないこの僕はそのことを理解していないか、彼自身の他者との関係においては、その領域に移ろうとしなかったのである。主君が彼に、「私がお前を憐れんだように ὥς [...] οὐκ ἠλέησα, お前も同僚を憐れむ ἐλεῆσαι べきではなかったか」と叱責したこの言葉の中では、主君は彼に、σπλαγχνίζομαιではなく、より一般的に「憐れむ」という意味で用いられる ἐλεέω を用いて語っているが、ここには、憐れみを受けた彼は、彼自身、たとえ臓腑が千切れるほどの同情とまでは行かなくても、憐れみの実践をすべきだった、という意味がくみ取れる。また、ἐλεέω という語に、心情的に「憐れむ」という意味だけではなく、「憐れみで相手を助ける」という、行為を含む意味があることもここで主君がこの語を用いた理由と考えられる<sup>31</sup>。憐れみは、心情の問題ではなく、実践の問題なのである。この譬えは、神に赦された人々が互いに実際に赦しあうことの当然性と必要性を王と僕、僕



同士の赦しの問題として提示するのである。

先に見た「敵を愛せ」との教えの結びには、「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」(5:48)とある。ルカの並行箇所では、「あなたがたの父が憐れみ深い οἰκτίρμων ように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい」(ルカ6:36)となっている。C.S. キーナーは、マタイの「完全な者になりなさい」とルカの「憐れみ深いものとなりなさい」は、おそらく、「全き」(whole)あるいは「欠けるところのない」(complete)という意味の同じアラム語の異なる翻訳だろうと指摘している<sup>32</sup>。

神に憐れまれ、神に負債(罪)を赦された者として、人間同士、互いに憐れみを持ち赦し合うことが人間の全き状態とされる。これは、神との関係においても人間同士の間においても和解の成り立った、真に「義」とされた状態であるから、ファリサイ派の人々の「義」にまさる(これは、実際のファリサイ派の人々ではなく、マタイ福音書が見るファリサイ派の人々であることは注意すべきである)、行為における「義」よりもずっと深い、根源的な義である。

この状態は、自分の全き状態が根本的に神の赦しに依存する、という認識に立つものであるから、自分だけでは何もできないという認識において、親や大人に無条件に頼る幼い子どものあり方と同様である。マタイ福音書のイエスは、「心を入れ替えて子どものようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」(18:3)と言う。マタイはこの言葉をマルコ10:15から持ってきているが、マルコでは、「子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」となっており、この書き方では、「子どもが神の国を受け入れるように神の国を受け入れる人」という意味なのか、「子どもを受け入れるように神の国を受け入れる人」という意味なのかがいまいなところを、明確に、子どものような心が神の国に入るのだとしている。そしてそれに続く「自分を低くして、この子どものような人になる人が、天の国でいちばん偉いのだ」(マタイ18:4)という言葉で、「子どものようであることは決して無邪気さとか幼稚さではなく、無力な存在であることを受け入れることだ」ということを示している。

しかしまた、それは決して、無力であるから何もできないししないということではない。むしろ一方で、自分のできる限りの憐れみの行為を、弱い隣人に対して実践することで、人は完全な全き存在になってゆくのである。イエスは、金持ちの青年に、「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、私に従いなさい」(マタイ19:21)と言う。

マタイは、マルコ福音書の「12:29 第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。』<sup>30</sup> 心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』<sup>31</sup> 第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない」(12:30-31)に多少の変更を加え、イエスの命じる言葉を、「22:37 『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』<sup>38</sup> これが最も重要な第一の掟である。<sup>39</sup> 第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』<sup>40</sup> 律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている」(22:37-40)としている。この第一の掟は、申命記の「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」(6:5)、第二の掟はレビ記の「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」(19:18)に基づいている<sup>33</sup>。マタイはこのように、これらの

二つの教えが律法（トーラー）と預言者の書の根幹にあることを明示し、これら旧約聖書の中心にある掟を実践することこそがイエスの言う、神の意思を行なうことであると強調するのである。その具体的な指針が「人にしてもらいたいと思うことはすべて、そのようにあなたがたも人にしなさい」（7:12）であると理解できる。

隣人愛の実践が、神の国に入るために決定的に重要な条件であることは、イエスが弟子たちに語る、マタイにだけある、最後の裁きの預言の言葉に顕著である。

25:31 「人の子は、栄光のうちに、すべての天使たちを彼と共にして来るとき、彼の栄光の座に着く。

32 そして、すべての国の民が彼の前に集められ、彼は羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、<sup>33</sup> 羊を右に、山羊を左に置く。

34 そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、私の父に祝福された人たち、天地創造の時からあなたたちのために用意されている国を受け継ぎなさい。<sup>35</sup> あなたたちは、私が飢えていたときに私に食べるものを与え、私ののどが渴いていたときに私に飲ませ、私が旅をしていたときに宿を貸し、<sup>36</sup> 私が裸のときに私に着せ、私が病気のときに私を見舞い、私が牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』<sup>37</sup> すると、義しい人たちが王に答える。『主よ、いつ私たちは、あなたが飢えているのを見て食べ物を差し上げ、あなたののどが渴いているのを見て飲み物を差し上げたのでしょうか。<sup>38</sup> いつ、あなたが旅をしているのを見て宿を貸し、あなたが裸でいるのを見て着せたのでしょうか。<sup>39</sup> いつ、あなたがご病気だったり、牢にいらっしゃったりするのを見て、お訪ねしたのでしょうか。』<sup>40</sup> そこで、王は答える。『まことに、あなた方に言うておく。私の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである。』<sup>41</sup> それから、王は左側にいる人たちにも言う。『呪われた者ども、私から離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。<sup>42</sup> お前たちは、私が飢えていたときに私に食べるものを与えず、私ののどが渴いていたときに私に飲ませず、私が旅をしていたときに宿を貸し、<sup>43</sup> 私が旅をしていたときに宿を貸さず、私が裸のときに着せず、私が病気のとき、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ。』<sup>44</sup> すると、彼らも答える。『主よ、いつ私たちは、あなたが飢えたり、渴いたり、旅をしたり、裸だったり、病気だったり、牢にいらっしゃるのを見て、お世話をしなかったのでしょうか。』<sup>45</sup> そこで、王は答える。『まことに、あなたたちに言うておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、私にしてくれなかったことなのである。』<sup>46</sup> こうして、この者どもは永遠の罰を受け、義しい人たちは永遠の命にあずかるのである。』（25:31-46）

ここでは、隣人愛を実践した人々の行為、実践しなかった人々の行為が、同じ行為の裏返しとして繰り返されることで強調され、対比される。これらの行為をしなかったことは、ただ、しなかったという中立的なことではなく、積極的な罪なのである。

ここで言われている「私の兄弟であるこの最も小さい者」が誰であるかは議論されており、マタイの記すイエスが他の個所（12:50; 28:10）で弟子たちを自分の兄弟と呼び、また、小さい者（謙虚な者）こそが神の国にふさわしいとしていることなどから、これは、イエスの弟子たちと見る見方もあるが、<sup>34</sup> ここは本当に神の国にふさわしい者が誰なのかを弟子たちに考

えさせる文脈であるから、これを弟子集団と同定するのは無理がある。一人一人が裁かれる最後の審判での状況であるから、ルツの言うとおり、確定した一つのグループとしての集団を考えることは妥当ではない<sup>35</sup>。むしろ、隣人愛の行為として、必要最低限の者にも事欠く弱者への配慮を促す言葉と考えた方がよいであろう<sup>36</sup>。

実践的信仰の要求は、マタイ福音書では他の福音書には見られないほど強く、これは、信仰が実践を伴わなければ、洗礼を受けた教会員であっても最終的に救われるとは限らないとの警告にまで強められている。その顕著な例が、「毒麦」の譬え(13:24-30)と、われわれが考察している「ぶどう園と農夫」の譬えに続く「婚宴」の譬えである。「毒麦」の譬えは、「天の国は次のようにたとえられる」(13:24)と始まる。良い種が蒔かれた畑の中に毒麦が混ざって生えてくるのであるが、早くに毒麦を抜いてしまうことを提案する僕に対して、主人は、両方とも育つままに刈り取りの時まで待って、刈り取りの時に毒麦は束にして焼き、良い麦を倉に入れるように指示する。この譬えには、マタイのテキスト中に説明が入れられており、イエスの口から「畑は世界、良い種は御国の子たち、毒麦は悪い者の子」(13:37)と解説される。ここで描かれる「世界」は、「御国の子=教会員」と「悪い者の子=教会外の者」とに分かれているのではなく、むしろハグナーが見るように「現在のところ人間社会は(そして教会ですらも)悪しき人々と神の国の人々が混在する」のである<sup>37</sup>。M. プールは、この譬えがマタイの教会の中の状況を表していると読んでいる<sup>38</sup>。終末の裁きの時まで、誰が良い麦で誰が毒麦なのかは分からない、誰が神の倉に入れられ、誰が束にして燃やされる方にまわされるのかは分からない、というこの譬えは、教会員になれば安心であるという見方が成り立たないことを示す。

それがより明確なのは、「婚宴」の譬えである。この譬えでは、王の婚宴に最初に招かれた人々が、婚宴の支度が整ってからひどく些末的な理由を口実に出席を辞退したために、王は家来に命じて町の大通りにいる人々を連れて来させる。家来が「善人も悪人も皆集めて来たので、婚宴は客でいっぱいになる」(22:10)。ここまでは、ルカ14:16-24に並行箇所があるが、マタイはこの後に、「22:11 王が客を見ようと入って来ると、そこに婚礼の礼服を着ていない者が一人見えた。12そして、彼に、『友よ、どうして礼服を着ないでここに入って来たのか』と言った。この者は沈黙してしまった。13そこで、王は側近の者たちに言った。『この男の手足を縛って、外の暗闇にほうり出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。』14招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない」(22:10-14)との4節を加えている。これは、一度宴席に連なったとしても(つまり、教会の中に入れられたとしても)それにふさわしい態度をしていなければ結局、最終的には神の宴席にはあずかれないとの譬えである。この話の筋書きからすれば、この男は通りにいるところを連れられてきたのだから、礼服など着てくる間がなく、そのままで来たように見える。そうでなくとも、大通りの人をみな連れてきたのであるから、礼服など持っていない者もいたであろう。王のこの要求は不自然にさえ見える<sup>39</sup>。しかし、不自然な印象を与えることで、マタイの譬えの中ではこの要求は非常に目立ち、強調されているのである。

「婚姻」の譬えと非常に似たことが、「毒麦」の譬えと同様「天の国」の譬えとして語られる、「網で集められた魚」(13:47-50)の譬えでも言われている。漁師の網はいろいろな魚を集め、網がいっぱいになると人々はそれを岸に引き上げて、良い魚と悪い魚をより分け、良い魚だけを器に入れ、悪いものは燃やしてしまう。この譬えも、集められる時には良いもの

も悪いものも集められるが、選別の時に良くなければ、「天の国」「神の国」には入れられないということを表しているのである。

## Ⅵ「良い実」の意味についての解釈

この譬えで、最後にもうひとつ、解釈を要するのは、「良い実」とは、何を指すのか、であろう。今まで本論はこれを、善い行いのこととして議論を進めてきた。しかし、これを、「善い行いをする人々」ととることも可能である。民の導き手として不適格な宗教的指導者を弾劾する文脈からは、新しいテナントは、良い導き手となり善い行いをする人々を生み出す弟子たちととることが自然である。しかし、マタイによる福音書においては、良い実が善い行いで新しいテナントは善い行いをする人々すべてなのか、あるいはそのような人々が良い実で新しいテナントとはそのような人々を生み出す弟子たちなのか、という区別は実際のところ意味がなくなっている。なぜならば、この福音書の最終で、イエスが与える宣教命令と、それを助けるために彼が共にいるという確約、すなわち、「28:19 あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、<sup>20</sup> あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(20:19-20) は、文脈からいえば、11 人の内輪の弟子に語られたものではあっても、明らかに、読者全員への励ましと確約として教会の信徒全員に向けられたものだからである。マタイによる福音書では、「世の終わりまで」、この世に生きるすべての信仰者が、宣教を命じられているので、一般の信徒と宣教を行う弟子との違いはなくなる。宣教は、神の意志を行なうことの重要な要素であり、宣教されて信徒になった人々全員が宣教者になることが求められているのがこの福音書なのである。

Ⅱで見たように、マタイによる福音書では、「ぶどう園」が「神の国」に言い換えられることによって、その言及する意味が微妙に変えられている。「ぶどう園」ならば、新しいテナントになる農夫は弟子たち、彼らが世話をしはぐくむ「ぶどう園」は彼らの宣教対象となる人々とともにとれるが、「神の国」であれば、それを与えられる「民」はすべて、神の意志を行なう真の信仰者となる。それゆえ、「良い実」の意味がここで人々とその行いのどちらとも取れまた、どちらも含蓄することは、マタイの書き方からの必然とも言える。

## 結論

マタイによる福音書の「ぶどう園と農夫」の譬えは、ユダヤ教の指導者たちへの批判として書かれ、過去の者たちが旧約の預言者を迫害し殺したように、イエスを殺すであろうが、神の不思議な計らいによって、神の国は彼らから取り上げられ、真に神の意志を实践する者たちに与えられると示す。具体的には、互いに対する赦し、和解、困窮している隣人に差し出す助けなどの隣人愛の行為を实践している人々、そしてそのような行為に加えて神の国の宣教を实践している人々が神の国の「民」となり、イエスはその国の隅の頭石とされるのである。しかし、イエスを殺す者たちには壊滅的な罰が降るであろう。

この容赦ない罰の預言と、たとえイエスを信じると言っても真に神の意志を实践する者でなければ神の国には入れないとの厳格な使信はマルコやルカの並行箇所には読み取れない厳しいものであるが、これを見落として、他の二つの福音書の並行箇所と同様にマタイを読むならば、それは誤りとなってしまふであろう。



注

- 1 マタイによる福音書の著者については正確には誰であったか学術的確定はなされていないが、便宜上本論では「マタイ」とする。なお、同様に、マルコによる福音書、ルカによる福音書の著者も、学術的確定はされていないが便宜的に「マルコ」、「ルカ」と呼ぶ。
- 2 マルコによる福音書の「ぶどう園と農夫」の譬えについては、本多峰子「共観福音書の神義論——マルコによる福音書を中心に」(東京大学博士論文, 2016 年 12 月), pp. 247-255 でより詳細に論じてある。
- 3 PHEME PERKINS, "The Gospel of Mark," in Katharine Doob Sakenfeld (ed.) *The New Interpreter's Bible*. vol. 8 (Nashville: Abingdon Press, 1995), p. 670 ; CRAIG A. EVANS, *Jesus and His Contemporaries: Comparative Studies* (1995. Boston and Leiden: Brill Academic Publishers, 2001), p. 396.
- 4 JOACHIM JEREMIAS, *The Parable of Jesus*, trans. by S. H. HOOKE, revised ed (London: SCM, 1963), p. 70.
- 5 Jeremias, p. 70.
- 6 KLYNE SNODGRASS, *The Parable of the Wicked Tenants* (Wissenschaftliche Untersuchungen zum Neuen Testament 27) (Tübingen: J. C. B. Mohr, 1983), p. 74.
- 7 以下、タルグムが加えた変更については、BRUCE D. CHILTON, *The Isaiah Targum*, Introduction, Translation, Apparatus and Notes (The Aramaic Bible Vol. 11) (Edinburgh: T. & T. Clark Ltd., 1987), pp. 10-11 の英訳を参照した。
- 8 Evans, p. 390.
- 9 Cf. BEN JOHNSON, "The Parable of the Wicked Tenants in Context: Jesus' Interpretation of the Song of the Vineyard in the Light of Second Temple Jewish Parallels." E-text retrieved on 17 January, 2009 from [http://kilbabo.files.wordpress.com/2009/01/powt\\_in\\_context.pdf](http://kilbabo.files.wordpress.com/2009/01/powt_in_context.pdf), p. 13
- 10 R. T. FRANCE, *The Gospel of Matthew* (The New International Commentary on the New Testament) (Grand Rapids, Michigan: Wm. B. Eerdmans, 2007), p. 460.
- 11 D. JOHN R. DONAHUE & DANIEL J. HARRINGTON, *The Gospel of Mark* (Sacra Pagina Series 2) (Collegeville: The Liturgical Press, 2002), pp. 341-342.
- 12 Jeremias, p. 72.
- 13 JOHN R. DONAHUE, *The Gospel in Parable* (Philadelphia: Fortress, 1988), p. 89.
- 14 JOHN P. MEIER, *Matthew* (New Testament Message 3) (Dublin: Veritas Publications, 1980), p. 241.
- 15 DONALD A. HAGNER, *Matthew 14-28* (Word Biblical Commentary 33B) (Dallas, Texas: Word Books, 1995), p. 621.
- 16 これを、イエスの刑死の状況に意図的に合わせたものと考えるのは、ARLAND J. HULTGREN, *The Parables of Jesus: A Commentary* (Grand Rapids, Michigan: William B. Eerdmans, 2000), p. 372; HAGNER, *Matthew 14-28*, p. 621; MEIER, p. 289 のように、これを単に異なる口伝伝承を反映しているためと考える研究者もある。ルカはマタイと同じ順なので、ルカとマタイがマルコと異なる伝承を手に入っていた可能性はあろう。
- 17 Jeremias, p. 29 は、その例として、ダビデがウリヤの妻バト・シェバを奪ったことに対する上記サム下 12:5f. のナタンへの叱責、その他、サム下 14:8ff, 列王上 20:40, 他のイエスの譬えの中ではマタイ 21:31、ルカ 7:43 を挙げている ; また、CRAIG S. KEENER, *A Commentary on the Gospel of Matthew* (Grand Rapids, Michigan: William B. Eerdmans, p. 1999), p. 514 も、Jeremias (Jeremias 同上書 1972 年版, p. 29) を参照して同様の指摘をしている。
- 18 HULTGREN, p. 373; ROBERT GUNDY, *Matthew: A Commentary on His Literary and Theological Art* (Grand Rapids: Eerdmans, 1982), p. 430.
- 19 ULRICH LUZ, *Matthew 21-28: A Commentary*, tr. by Wilhelm C. Linns (Minneapolis: Fortress Press, 2005), p. 43.
- 20 D. J. HARRINGTON, *The Gospel of Matthew* (Sacra Pagina Series 1. Collegeville, Minnesota: The Liturgical Press, 1991), pp. 389-390. この言葉は、イエスの死の責任をユダヤ人の子孫末代にまで帰すように理解されて、ユダヤ人迫害の正当化に悪用されてきたが、誤った解釈である。
- 21 Snodgrass, p. 92 は「異邦人」の意味ならば、ἐθνει と複数にしたであろうと反対している。

- 22 Meier p. 245; Snodgrass, p. 90 は、このような見方があることを紹介して、「これがこの譬えのメッセージだとは信じられない」と不賛成を表明している。
- 23 Charles E. Carlston, *The Parables of the Triple Tradition* (Philadelphia: Fortress Press, 1975), p. 45 は、ただ異邦人というだけではなく、実を結ぶ、キリスト教の教会、というように理解している。
- 24 Hagner, *A. Matthew 14-28*, p. 617.
- 25 Warren Carter & John Paul Heil, *Matthew's Parables: Audience-Oriented Perspectives* (The Catholic Biblical Quarterly Monograph Series 30) (Washington, DC: The Catholic Biblical Association of America, 1998), p. 164.
- 26 Snodgrass, p. 94 は、この見方。
- 27 Keener, *A Commentary on the Gospel of Matthew*, p. 507; Snodgrass, p. 93.
- 28 Marius Reiser, *Jesus and Judgment: The Eschatological Proclamation in Its Jewish Context*, tr. by Linda M. Maloney (Minneapolis: Fortress Press, 1997), p. 254.
- 29 1 デナリオンは、大体人ひとりの日当とされる。1 万タラントンは 6000 万デナリオンなので、彼の借金は、家来が許してもらった 1 万タラントンの 60 万分の一に過ぎない。
- 30 σπλαγχνίζομαι の意味については、Helmut Köster, “σπλάγχνον, σπλαγχνίζομαι, εὐσπλαγχνος, πολὺσπλαγχνος, ἄσπλαγχνος,” *Theological Dictionary of the New Testament*, vol. 7 (Grand Rapids, Michigan: Eerdmans, 1971), pp. 548-559; N. Walter “σπλαγχνίζομαι,” in *Exegetical Dictionary of the New Testament*, vol. 3 (Grand Rapids, Michigan: Eerdmans, 1993), p. 265 を参照。
- 31 Rudolf Bultmann, “ἐλεος, ἐλεέω ἐλεήμων, ἐλεημοσύνη, ἀνέλεος, ἀνελεήμων,” in *Theological Dictionary of the New Testament*, vol. 2 (Grand Rapids, Michigan: Eerdmans, 1964), p. 478.
- 32 Craig S. Keener, *The Gospel of Matthew: A Socio-Rhetorical Commentary* (Grand Rapids, Michigan/Cambridge, U.K.: William B. Eerdmans, 2009), p. 205. ここで、Keener は、John A. T. Robinson, *Can We Trust the New Testament?* (Grand Rapids: Eerdmans, 1977), p. 32 を参照している。
- 33 この戒めの意味は、ユダヤ教の伝統では、二つ心無く（心の中に分裂があってはならない）、命（体に息がある限り）を尽くし、資力を尽くして、恐れからではなく愛から神の律法を守りなさいとのことであると理解されており、人が全人格的に神への愛に生きることを命じるものである（Cf. *Sifre: A Tannaitic Commentary on the Book of Deuteronomy*, trans. from the Hebrew with introduction and notes Reuven Hammer, *Yale Judaica Series 24* (New Haven: Yale University Press, 1986), pp. 59-60; Bruce Chilton & J.I. H. McDonald, *Jesus and the Ethics of the Kingdom* (London: SPCK, 1987), pp. 92-93)。申命記 6:5 は、LXX では「心」には καρδία、「魂」には ψυχή、「力」には δύναμις を用いている。マルコでこれが「心 (καρδίας) を尽くし、精神 (ψυχής) を尽くし、(διανοίας) 思いを尽くし、力 (ἰσχύος) を尽くして」(12:30) とされているのは、この福音書記者が申命記 6:5 の心と魂と力という 3 つの項目を 4 つに増やしたというよりもむしろ、申命記における「心」を正しく表すためにギリシア語では καρδίας (心 heart) と διανοίας (意思 will, purpose) の両者が必要と考えたからであろう。マタイは ἐν ὅλῃ τῇ καρδίᾳ σου καὶ ἐν ὅλῃ τῇ ψυχῇ σου καὶ ἐν ὅλῃ τῇ διανοίᾳ σου (22:37) と、「力」に代えてマルコの用いた「思い」διάνοια を使用している。
- 34 Keener, *The Gospel of Matthew: A Socio-Rhetorical Commentary*, p. 605
- 35 Luz, pp. 281-282.
- 36 Hagner, *Matthew 14-28*, pp. 743-744 や France, pp. 963-964 は、ここでは、人間にとって最低限必要なものが挙げられているとして、キリスト教徒にかぎらず、そのような者さえも不足する人たちを考えている。
- 37 Donald A. Hagner, *Matthew 1-13* (Word Biblical Commentary 33A) (Dallas, Texas: Word Books, 1993), p. 395.
- 38 Matthe Poole, *A Commentary on the Holy Bible*, Vol. III: *Matthew-Revelation* (1685; London: The Banner of Truth Trust, 1963), p. 63.
- 39 Hagner, *Matthew 14-28*, p. 631.

(本稿は二松学舎大学平成30年度海外特別研究員として、ティンダルハウス聖書学図書館で1年間の長期研究期間を与えられた成果の一部である。感謝とともにそのことを明記したい。)